お茶の水の子

No.10
令和7年1月31日
千代田区立お茶の水小学校
校長　伊藤　栄司

教員を育てる

校長　伊藤　栄司

本校には時間講師、支援員等を含めると約５０名の教員が児童の指導に当たっています。教員にも一人一人個性があり、教え方は千差万別ですが「子どもたちのために何かしたい」との気持ちは共通しています。しかし、気持ちだけで指導することはできません。学生のころから基本を学び、どのように子どもに接し導くことが良い指導なのか学んでいきます。

基本的に人は教わったようにしか教えることができません。全都の校長会でも話題になるのは教員の育成です。どのように教員を育てると良いのか日々考えています。

「進みつつある教師のみ人を教える権利あり」※

これはドイツの教育学者ジェステルリッヒの言葉です。「自分自身を見つめ、日々努力を続けている間だけ人に教えることができる」と解釈し教員にも伝えています。学び続け指導力を上げることは教員にとって何よりも大切なことだからです。各種研修会や校内研等教員には学ぶ機会があり、忙しい中でも最新の指導や児童理解の方法を身に付けることが求められています。

つまり、教員を育てる方法の一つは本人の努力と研修や校長、副校長の指導、先輩教員からの指導等です。そして、もう一つ、重要な関わりから大きく教員が成長する瞬間があります。

言葉の力

「先生、今日息子が『割り算ってどういうことかよく分かったよ』と言って嬉しそうに帰ってきました。」

「運動が嫌いだった娘が、運動会の表現運動に夢中になって取り組んでいました。本番でも上手に踊れているのを見て感動しました。」

と声が寄せられることがあります。大きな行事だけでなく、日ごろの授業でも子どもたちのことを第一に考え行動している教員にとって、何よりも嬉しく励みになる言葉です。こんな時、「よし、もっと頑張ろう。」「もっとこんな工夫をしてみよう。」とモチベーションが一気に向上します。保護者の一言が教員を大きく育てる瞬間です。

教員を育てる視点

実は教員も自分の指導が正しいのか間違っていたのか不安に思うことがあります。しっかり準備してきたつもりでも「あれ？」「どっちだっけ？」と教科書を見直すこともあります。また、運動会や展覧会、学芸会等の大きな行事の時は子ども以上に緊張し、無事成功を祈る教員もいます。それだけに、保護者の方からの励ましの言葉は、意欲を高め情熱をかき立て、結果的に指導力の向上に繋がります。

優れた教員を育てることは確実にお茶の水小学校の子どもたちの力を向上させます。２０日から始まる展覧会では教員を育てる視点も心のどこかに留めつつ鑑賞をお楽しみください。

※ジェステルリッヒ「ドイツ教師に寄せる教授指針」より